



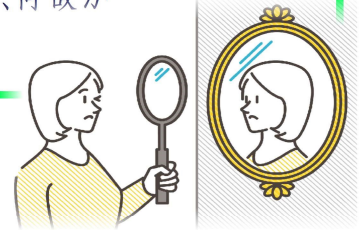
## 照らし出される姿

『仏は私に何をくださるか』米沢英雄 著より

私が人生の不幸を悲しむと、<本当の人間になれぬのがもっと不幸でしょう>と、Kさんが言う。…自分の心の位置を知れとか、我が身に遇えとか、そんなことが今の私に必要なのか。もう、会いたくない。聞きたくない。…聞きたくないと思っても、何故か心に残る。忘れようと思うほど、心に引っかかる。

医師であり念仏者でもあった米沢英雄さん（故人）の著書のなかに、不治の病に侵され絶望している女性と、彼女へお念仏の救いを懸命に伝えようとした方（Kさん）とのやり取りが書かれています。

見舞いの人々からどんな慰めを受けても、病魔に侵された心が救われることはありませんでした。しかし「**本当の自分に会うことでしか、生死の問題は解決しない**」というKさんの真摯な言葉に、初めは「聞きたくない」と思っていたこの女性も、次第に耳を傾けるようになっていきました。



Kさん 「私は計算ずくの女ですから、必ず裏があります。あなたはどうか。仕えた私、務めた私、耐えてきた私、その裏にあるもの、欲と名の外に一步も出られぬ私、真実ひとかけらもない私、媚びへつらいの心、恥も知らず、謝恩もうすい私、私はこういう自分をもっております… 怒り、腹立ち、そねみ、そしり、悪いとわかっている、それをどうすることもできぬ自分、動いてやまぬ心、一瞬も浄らかな心をもたぬ心が私にあるが、あなたはどうか。」



女性 「一睡もせずに自分を見つめる。…ある、あります、表面に出さずに、くすぶり続ける自分、外面だけの笑顔で、泣いて怨んで、引きつり顔で暮れた二十六年。情けない、だらしない、おろかな私が出てくる。何という女であろう。激しい自己嫌悪が全身を走る。」

お念仏の救いに遇うということは、阿弥陀如来の光に照らされるということです。**阿弥陀如来の光は、私たちの歩む道を温かく照らしてくださると同時に、私たち自身の醜い姿を照らし出します。**自分でも気付かなかった醜い姿を知るの嫌なことですが、それから目を背け、ごまかしたままでは本当の心の安寧は得られないことを、二人のやり取りが示してくれています。

この女性の病は、残念ながら治ることがありませんでした。しかし次のような言葉を遺してくださっています。

「危ないところでした。皆様に怨みを残して終わるところでした。」  
「朝が来た。今日も命をいただく。恥かしい悲しい業が、念仏の手を合わせる。」  
「このままで、申し訳ないままで、帰らせていただく身の幸せ。私は幸せ。」

